

氏名・（本籍地）	鈴木雄太（東京都）
学位の種類	博士（仏教学）
学位記の番号	甲第116号
学位授与の日付	平成31年3月15日
学位論文題目	聖憲教学の研究
論文審査委員	主査 堀内規之 副査 大塚伸夫 副査 福田亮成 副査 野呂靖

鈴木 雄太氏 学位請求論文審査報告書

「聖憲教学の研究」

論文の内容の要旨（1200字以上）

本学位請求論文は、「聖憲教学の研究」と題し、中世期に活躍した根来の学僧・聖憲を中心に据えて、その教学、さらには新義真言教学史における聖憲の位置づけをあきらかにすることを目的として、序論二章・本論十六章・結論にわたって考察を施したものである。そもそも、これまでの聖憲に対する研究は、真言宗学上では頼瑠の継承者として位置づけられ、また華嚴宗学では凝然や盛誉の一門下という位置づけがなされ、聖憲という一人の学僧の存在意義を見いだすことはなく、さらには聖憲を取り上げた研究成果そのものの数が少ないという。このことを是正するためにも、本論文の姿勢として論者は聖憲が基点であり、聖憲を中心として他の学僧がいるということを常に念頭に置きながら考察するよう心掛けたという。またできる限り、聖憲にまつわる様々な事象に対し、それぞれ一線を隔するのではなく、俯瞰的に、横断的に、立体的に捉えることを意識したと論者は述べている。以下、本論文の内容について概観したい。

序論において、先行研究の概要とそこから見えてくる課題を抽出、さらには本論文で用いる用語の概念の確認をおこなっている。それらを受けて、以下五部にわたる本論が展開されている。

すなわち、第一部では「聖憲の事績について」として、聖憲の事績と聖憲に関わる教学的系譜について取り上げている。第一章では聖憲の生涯、第二章では聖憲の著作とその先行研究について概観している。続く第三章では真言宗学における系譜として、頼瑠の教主義を受け継いでいながらも聖憲は独自の解釈を示しており、単なる頼瑠の継承者ではないという一面を指摘している。また、第四章では華嚴宗学における系譜として、華嚴の教学史上における聖憲の立ち位置を、先行研究を参照しながら明確に位置づけている。

このうち先ず、聖憲が重要視した華嚴教学について、その教学にとって重要な三つのタームを取り上げて論じたものが、第二部の「聖憲に到る華嚴教学の解釈」である。第一章では「三生成仏」、第二章では「初発心時便成正覚」、第三章では「事・理」を各々取り上げて論じている。具体的には、第一章では中国と日本におけるそれぞれの華嚴学派における「三生成仏」解釈の展開を確認している。聖憲は華嚴教学の三生成仏に対し、一生涯での成仏を可能とみるという特異な見解を示しているという。この背景に論者は、①高山寺教学からの影響 ②華嚴と真言の成仏論を会通する意図がある、という二つの可能性を示している。その一方で聖憲には、一乗教では必ず劫を経てから成仏するという「一乗経劫」の立場があることを論者は挙げ、聖憲が華嚴教学の成仏観に対し、「一生涯での成仏」と「一乗経劫」という全く立場を異にする見解を有している理由について考察を行っている。第二章では、「初発心時便成正覚」について日本華嚴学派における解釈の相違について検証している。聖憲は凝然等の華嚴宗学者と同様の解釈を示しているが、論者は華嚴の初発心時便成正覚と真言の即身成仏を同列に位置づけるなど、聖憲独自の解釈が見られることを指摘している。また、聖憲は『五教章聴抄』では初発心時便成正覚と即身成仏を同列に扱うのに対し、真言宗学の書である『大疏第三重』では華嚴と真言の教学の成仏論を混同することを批判しており、聖憲の著作でありながらも両著作での聖憲における解釈の差異がみられることを指摘している。続く第三章では、「事・理」について取り上げられている。聖憲は前述のよ

うに、その著作の中において、まるで相反するかのような二つの見解を示している。この問題は、華嚴教学における事事無礙と、真言教学における即事而真との同異についての議論が出发点とされ、そこで問題となっているのが性相歴然なのか、摂相帰性なのかということであるという。聖憲は、『大疏第三重』では華嚴は摂相帰性、真言は性相歴然とするも、『五教章聴抄』では天台・三乗が摂相帰性、華嚴は性相歴然と位置づけているという。この聖憲の見解の差異について論者は、『大疏第三重』において真言と華嚴を比較した説明が、『五教章聴抄』では華嚴と天台・三乗を比較するものとして使用されており、『五教章聴抄』において華嚴の教理を一つ高め、真言の教理へと近づけようとする姿勢を確認している。第四章においては、第二部のまとめとして論者は聖憲の教学的立場を指摘している。すなわち、聖憲はあくまでも真言学僧であり、弘法大師空海の十住心教判思想に基づいて『五教章聴抄』も真言学僧として、自ら学んだ華嚴の教理を真言へと近づけ、あるいはこれまで学んできた真言の知見に基づいて華嚴を解釈しようと試みた著作と位置づけている。

第三部は「究竟の境界について」と題して、新義真言教学における究竟の境界について、聖憲の教学的立場を中心に論じている。第一章では果分不可説という視点から論じている。新義教学の特色である加持身説法の論理構造を聖憲が説明する際に、因分可説・果分不可説の論理を用いていることを論者は指摘している。この聖憲の解釈について論者は、華嚴教学の教理を受容し、それを真言密教の教理解釈にいかしている現れであるとしている。第二章では、真言教学における初発心時便成正覚の解釈について、古義学派と新義学派において相違があることをあきらかにしている。すなわち、新義学派が究竟覚の立場をとり、古義学派が分覚の立場をとっているが、その理由について論者は、古義学派には究竟の境界が一つしかないが、新義学派には「顕密対弁に即する究竟」と「新古対弁に即する究竟」の二つの究竟が存することをあきらかにしている。この違いによって、新義学派は華嚴の初発心時便成正覚を究竟覚と判じても、さらに一段高い究竟の世界があるためと指摘している。第三章では、不二摩訶衍法や如義言説を中心として新義教学における『釈摩訶衍論』の解釈の一端を示している。すなわち、頼瑜や聖憲は不二摩訶衍法や真如門の在り方を四重秘積という解釈方法によって、新義教学独自の教理に相当させていることをあきらかにしている。また『釈摩訶衍論』を主題とする著作では、対弁門の主張をおこなっているのに対して、密教の経論を主題とした著作においては、『釈摩訶衍論』に対しても細論門に即した主張をしていることを指摘している。第四章では、第三部のまとめとしている。すなわち、新義学派では顕密対弁門と自宗細論門の二つの立場を有するという。対弁門の立場では四重秘積を用いず、果分不可説の顕教よりも、果分可説の密教の優位性を示すが、果分自体は同じであるという。つまり、顕密の差異はその果分を説けるか否かにあるとする。だが細論門に即するときには密教をさらに分解し、法身でさえ説けない境界があることを主張する。そしてこの境界こそが、四重秘積の第四重に当たり、無相至極なる境界なのであるということをあきらかにした。それを聖憲は、無相至極と題する論義を設定し、新義学派における無相至極という立場をとることをあきらかにしたことを指摘している。

第四部は、聖憲における機根論を展開している。すなわち、第一章では『大疏第三重』を取り上げて、『大疏第三重』に説かれる勝慧機・劣慧機という二類の機根観、大機・小機・結縁機という三類の機根観について、算題を俯瞰的に見通した上で整理し、両者の関係を体系づけている。『大疏第三重』の機根論は、密機に対するものが中心であったが、次に取り上げた『釈論第三重』では顕機についても聖憲は言及しており、聖憲が不二摩訶衍法の機根（不二機）に対し、二通りの解釈を行っていることを指摘している。すなわち、一つは中国の注釈書に基づき、華嚴の視点から不二機を円教（華嚴）に当てる釈、もう一つは空海の解釈に基づき、真言の視点から不二機を密教（真言）に当てる釈であるという。論者は、これが聖憲における『釈摩訶衍論』の捉え方に関係していると分析している。第三章は第四部のまとめとして聖憲の機根論を概観し、整理している。

第五部は「新義真言教学史における聖憲の位置づけ」と題して、頼瑜・聖憲・運敞という新義、特に智山教学の系譜に連なる三人の学僧を取り上げ、新義教学の展開を捉えるとともに、新義真

言教学史における聖憲の果たした役割について考察している。特に、第一章では三密具闕、第二章では阿字本不生という視点によって三者の解釈等の相違を論じている。一般的に、三密具闕に対して頼瑠が三密双修の立場であり、聖憲が一密二密の立場とされてきた。しかし、その内容を精査すると、頼瑠・聖憲の解答はその内容自体に違いがあるわけではなく、強調したい部分が僅かに異なるのみであるということ論者は分析している。そして、論者は進んで、このことが、同様の内容にも関わらず、異なる視点を強調する必要があったという可能性を論じている。そこには、頼瑠による新義教学が広まり、古義学派との教学的相違を打ち出さなければならない、聖憲の置かれた状況が関わっていると指摘している。また、これまでの認識では阿字本不生の概念について、古義学派は表徳的解釈、新義学派は遮情的解釈と断定されてきたという。しかし頼瑠・聖憲・運徹の見解を詳細に検討すると、頼瑠と聖憲は表徳的解釈、運徹は遮情的解釈を往々にしておこなっている事を指摘している。また、運徹においても表徳的解釈を否定する立場ではなく、単一的に密教=表徳とすることへの警鐘として論を展開していることを論者は指摘している。そして、論者はこの三者の見解を四重秘釈に当てはめて解釈を施し、頼瑠は第一・二・三重の関係については論じず、聖憲は第二重と第三重との関係性を指摘し、運徹は第一重と第二重・第三重の連続性を主張しているという。このことから論者は、頼瑠→聖憲→運徹という新義教学の展開を辿ることで、第一重から第四重まで、すべての関係性を知ることができるという。このことによって、新義教学は頼瑠から聖憲を経て、運徹へと継承する中で、より一層深化し、体系化されていく過程が論者によって明らかになった。

以上、序論と本論の五部にわたる論述によってあきらかになったことを踏まえた上で、論者は総括として聖憲という学僧の教学的位置づけについて、次のような結論を提示している。すなわち、聖憲は頼瑠以降の根来の教学を整理し、深化させ、時に新しい解釈を施しながら、自らの教学を形成していったという。そして、そのような背景のもとで形成された教学が、「聖憲の教学」なのであり、そういった聖憲の姿勢こそ、新義真言教学史において聖憲が果たした意義としている。さらに、論者は「関心」と「使命」というキーワードを用いて、聖憲という学僧の生涯を説明している。すなわち、真言教学を修学していくことによって聖憲の中には、真言と華嚴の教学的相違はどこにあるのかという疑問が生じ、それが久米田寺における華嚴の修学につながっていくという。この久米田寺における修学によって、聖憲自らの「関心」が解決したという。次に聖憲が目指したものは、自らに課された教学に対する「使命」を果たすことであったという。その「使命」こそが頼瑠によって端緒を開いたばかりの、そして未整理な新義教学を整え、初学者や後世の学僧へと伝えていくことであったという。聖憲にとってその「使命」とは、新義教学を後世へと伝えていくだけに留まらず、ひいては空海教学を、すなわち真言教学の真意を、後世へと伝えること、密教の寿命を永く延ばすことにもつながってくることでありとしている。若くして真言密教の基本を学び、その後自らの教学への「関心」と向き合い、そして自らに課された教学の「使命」と向き合い、生涯を通して教学と対峙してきた、それが聖憲という学僧であると論者は評している。

審査結果の要旨（1200字以上）

論者は、一貫して聖憲という学僧を研究対象として取り組んできており、先行研究にも目を配り、聖憲のみならず新義教学研究が抱えている課題にも、幅広く知見を有している。今回提出された課程博士請求論文は、これまで各種学会で発表をおこない、その発表に基づいて投稿された研究論文の成果に一貫性を持たせ学位請求論文として提出されているものである。以下、大正大学学位論文内規に示されている基準（研究対象と研究目的が明確であること・研究目的に応じた適切な研究方法が採用されていること・研究資料が適切であり、分析や考察が適切であること・先行研究を的確に検討していること・論理と叙述に整合性と一貫性を有し、形式や表記が適切であること・客観性と独創性を有し、当該分野に大いに寄与する内容であること・将来にわたって継続的に発展可能な研究内容であること）に即して報告をおこないたい。先ず、当該請求論文は研究対象として、中世期に活躍した根来の聖憲という学僧を設定している。その上で研究目的は、その聖憲の教学、そして新義真言教学史における聖憲の位置づけを考察することと、論者は明確に位置づけている。この明確さは論者をして、その論述姿勢として一貫せしめている。すなわち当該請求論文は、聖憲に到る教学上の系譜、さらには時代的に、聖憲と他の学僧との比較をおこないながらも、聖憲への教学的受容に注目するのではなく、聖憲と他の学匠において如何に教学的意見が相違しているかに焦点を当てることによって、これまでほとんどといいいほど注目されてこなかった「聖憲の教学」を解明するに必要な事項を取り上げて論述展開をおこなっている。

そして、論者は聖憲について論述するにあたり、その修学の内容から華嚴宗学としての立場と真言宗学としての立場という二つの立場を有している聖憲の著作群について、「真言に即する著作」「華嚴に即する著作」という分類をおこないつつも、芭米地誠一氏による「制度的兼学」と「重層的（包摂的）兼修」の指摘によって、聖憲の真言学僧としての立場を明確に論じている。このように、先行研究に対しては、十分な配慮がなされ、当該請求論文における註のほとんどが先行研究に関するコメントとなっている。

その上で、論者はこれまでの先行研究が提示してきた内容について、あらためて原典史料を精査することによって、従前より一般的に言われていた内容が必ずしもその内容を正確に伝えていないことも多く指摘している。このことも、前述したように、聖憲の教学というものをあぶり出そうとする目的・研究姿勢によってもたらされた当該請求論文の成果といえる。

また、口頭試問において高い評価を受けた点は、まず形式・表記が適切、論述の展開が明快、なによりも読みやすい文章であり、聖憲を取り上げつつも、論義や頼瑠、どちらに偏るわけでもなく、だからといって論義と頼瑠についての考察が不十分ではない点が高く評価された。さらに、中世仏教研究という視点からすれば、思想に肉薄した論文であり、真言教学の中で華嚴教学の三生成仏と初発心時便正覚を位置づけたことは高く評価すべきともされた。翻って、さらに考察すべき内容として指摘を受けたことには、第三部のタイトルについての再考、三生成仏を時間論、身体論のいずれで捉えるべきなのか、高山寺系華嚴と聖憲の関係、聖憲における南都という学びの環境について、頼瑠と聖憲の解釈の相違について歴史的背景の考察、さらには論義書に示されている教えを聖憲の思想と考えてよいのか等々の指摘があった。これらの考察すべき内容は、いわば論者に対する委員等からの今後の宿題ともいうべき内容である。無論、これらの指摘については、論者自身が今回の考察において不足と考えている部分であり、今後論者のライフワークとして考察していくことを委員等が望んでいることでもある。それは、将来にわたって継続的に発展可能な研究内容であり、それを成し得ることが論者に可能であることを委員各位が認めている証左である。

以上の如く、当該請求論文において論者が示した考察の仕方は、丁寧であり、論述の展開も着実であり、誠に読みやすい文章としてまとめられている。また、考察過程において、多くの価値ある具体的成果を示しており、この学問領域に大きく貢献する優れた研究といえよう。前述のような口頭試問における指摘は、当該請求論文の価値を全く損なうものではなく、今後の聖憲教学の研究、あるいは新義教学の解明の方向性を論者に示したものと受け止めて、さらなる精進を、そして大いなる成果を挙げられんことを期待するものである。

以上、これまでの報告内容を鑑み、本審査を担当して戴いた大塚伸夫先生（副査・大正大学学長、教授・博士（仏教学））・福田亮成先生（副査・大正大学名誉教授・文学博士）・野呂 靖先生（龍谷大学准教授・博士（文学））および堀内（主査・大正大学准教授・博士（仏教学））の四名の総意として、鈴木雄太氏提出の学位請求論文「聖憲教学の研究」が課程博士論文と認定することに相応しいとの結論に到ったことを報告するものである。

公表予定

日程	平成 年 月 日
公表形態	①掲載誌名：【 】【 】号・巻 【 】頁 【全文・要約】
	②単著（発行者）
題目	<※タイトルを変更した場合>